令和７年度第１回相馬市総合教育会議議事録

１　開催日時
　令和８年２月２４日（火）
　開会　午前１０時００分　　閉会　午前１１時３０分

２　開催場所
　相馬市役所　３階　正庁

３　出席した構成員

相 馬 市 長	阿　部　勝　弘
教　育　長	福　地　裕　之
職務代理者	宗　形　明　子
教 育 委 員	菅　野　明　彦
教 育 委 員	関　根　　進
教 育 委 員	森　　陽　子

４　欠席した構成員　　なし

５　事務局関係
（相馬市）

企画政策部長	佐　藤　芳　男
企画政策課長	落　合　武　志
企画政策係長	森　　洋　人

（相馬市教育委員会）

教育部長	横　山　英　彦
生涯学習部長	牛安澤　美　智
学校教育課長	志　賀　拓　広

６　傍 聴 人　　なし

７　協議事項
（１）重点的に講ずべき施策
　　学力向上の取組について（ＲＳの視点を意識した授業改善）
（２）報告事項
　　相馬市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について
（３）その他

８　議事の経過

１　開　　会（企画政策課長）

２　市長あいさつ

（要旨）

市長に就任して１か月が経過しました。その間、各団体の皆さまにご挨拶をさせていただきながら、話を聴かせていただいております。市民の皆さまの様々な声を聴きながら、市政を先に進めてまいりたいと考えています。

市長就任にあたり「誰もが安心し、誇りを持って、笑顔で暮らせる相馬市」の実現に向けて、４本の柱を掲げさせていただきました。その中でも最も大切な第１の柱と位置付けているのが、「ひとを大切にするまちへ」であり、教育分野はもちろん、福祉、市民生活に関わる部分、何よりも、今暮らしている市民、またこれから相馬を担っていく子どもたちが安心して、元気に過ごして欲しいという点から掲げたものです。

その中でも、教育については、これまで相馬市が進めて来た学力向上の取組、読解力向上、情報通信技術を活用した教育、RS と ICT を両輪として進めてきましたが、それを継続してその成果を着実に積み重ねていってもらいたいと考えています。これまでの成果が、少しずつ現れて、子どもたちの成長や前向きな行動の変化が実感できているという風に伺っているところです。

教育委員の皆さまに様々なご意見をいただき、改めて、市長と教育委員会で本市の教育の方向性について確認をしながら、時には、大きな方向性について議論する場を持ちながら、本市の教育行政を一緒になって進めてまいりたいと思います。

本日は、忌憚のないご意見を賜りますようお願いします。

３　教育長あいさつ

（要旨）

総合教育会議は、教育施策等について協議・調整をする場として、教育の中立性・継続性・安定性等を確保するために 2015 年に設置されたものです。この会の目指す方向性は、首長と教育委員会が連携を図りながら、互いの意思疎通を図り、教育課題や目指す姿等を共有しながら連携していくということです。

本日の議題は、「学力向上の取組について」です。本市においては、読解力に視点を当てた授業改善や様々な取組を行いながら、子どもたちの学力向上を目指してまいりました。

今年度、全国学力・学習状況調査において、一定の成果は得られた一方、算数・数学、そして、中学校において、課題が見られたことから、現在の状況、今後の取組について、ご協議をお願いします。

なお、報告事項として、教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について説明させていただきます。

４　協　　議

（１）重点的に講ずべき施策

学力向上の取組について（ＲＳの視点を意識した授業改善）

●協議内容

阿部勝弘市長　本日の議題については、何かを決めるということではなく、状

況の確認と、その状況について委員の皆さまから様々なご意見をいただくということを目的とすることでよろしいでしょうか。

福地裕之教育長　決定の場ではなく、ご意見を頂きながら、今後の方向性を見出していきたいということでございます。

阿部勝弘市長　そのようなことでご理解をいただき、進めていきたいと思います。

横山英彦教育部長　本日の議題である学力向上の取組は、令和２年度から取組を開始し、各学校の校長先生と各学校に１名いる研究指導員の教員を中心に進めてまいりました。先進的な取組であるため、当初は、手探りの状態からスタートし、各学校の反応もまちまちの状態ではありましたが、昨年度あたりから、市内全校が足並みを揃えて取り組めるようになってきたと感じています。

本年度についても、各校長のリーダーシップの元、市内一丸となって取り組む風潮ができて来たと感じております。

横山英彦教育部長　（別紙資料により説明）

菅野明彦委員　資料３－１全国学力・学習状況調査結果において、小学校では良い結果が出ましたが、中学校では全国平均を下回った理由について、今後 RS の視点を意識した授業改善を続ければ効果が出てくるのか、それ以外の基礎学力的な部分に原因があるのか、そのあたりはどう考えていますか。

横山英彦教育部長　本年度の RST の結果と全国学力・学習状況調査結果について、学校ごとの分析をしてみると、読解力が高い学校ほど、学力テストの成績も上がるという結果になっています。今回、中学校では全国平均を下回っておりますが、一部の学校では、全国平均を上回っている状況です。

菅野明彦委員　RS と ICT を両輪とした学力向上という方針をどのように進めていくのでしょうか。

横山英彦教育部長　RS と ICT、どちらか一方に偏るのではなく、目的に応じてバランスよく進めていくことが大切であると考えているところです。

宗形明子委員　RS を始める時期がすごく大事だと思っています。中学校から RS の授業を始めた子どもと、小学校低学年から始めた子どもで、母集団が違うため一概には比較できませんが、遅くから始めた場合には効果が出にくいのではないかというお話を「教育のための科学研究所」の先生から伺っています。

また、RS と ICT の関連について、ICT を進めている地域に伺うと、ICT は学力向上に直接はつながらないという結論が今のところ出ているというお話が出ていますので、これからも RS と ICT の分量の兼ね合いを見ながら進めていくべきではないかと思います。

森陽子委員　勉強に対して集中力のない子どもが、ChatGPT などに頼りながら学習することで、やっと進められるということもあるので、ICT を活用するということは良いことだと思います。勉強する意欲につながるのであれば、ICT の活用も、長い目では結果につながっていくのではないかと思います。

阿部勝弘市長　勉強に対する集中力や意欲を引き出す効果ついて、RS と ICT、それぞれにあるのだろうと思いますが、実際の現場での感じ方について教えてください。

志賀拓広学校教育課長　資料中の１（３）これまでの成果と課題についての部

分に記載していますが、「共書き」「聴写」「視写」という取組があります。「共書き」は、教員が子どもと一緒のスピードで板書したものを子どもがノートに書き写すもの、「聴写」は、教員が話した内容を子どもたちがそのままノートに書くもの、「視写」というのは、教員が黒板に板書したものを書き写すというものです。

相馬市では、これらを全ての授業において、先生方が活用しています。そうすると、児童生徒への指示が通るようになり、授業がやりやすくなっている、という効果が出ています。

先ほど、森委員から、集中力の低い子どもがいるというお話がありましたが、各授業において、先生が板書したら、一緒に書く、スタートラインを揃えるということを低学年の頃から積み重ねて取り組んでいますので、授業を視察しても、これまでは、子どもたちの集中力が低く、授業に入るまで、ノートに書き写すまでに時間がかかるという状況がありましたが、そういったことがだいぶ減って、集中力が高まってきた印象があります。そういった意味でも、RS の視点を意識した授業改善というのは、授業のやりやすさ、勉強のスタートラインという意味で、効果があると考えています。

一方、ICT の活用については、ICT を活用したからといって学力が上がるわけではないということを先生方は十分理解したうえで、これをどのように、どのような場面で効果的に活用して時間短縮や共有化の促進につなげていくかという視点で活用しています。

場面に応じて、RS の視点を意識した授業、ICT を活用した授業に取り組むのが大切と考え、先生方とは話をしているところです。

森陽子委員　誤解を招いてしまいましたが、先ほどの意見は、家庭学習でのことについて述べたものでした。

RS の視点を意識した授業で、先生が飽きない授業をして、変わってきているのはすごく良いことだと思っています。

母親の視点で、家庭学習において、集中して解くことができない、ICT を活用して調べながらではないとできないという事が、お伝えしたかった点です。

阿部勝弘市長　事務局から何か補足はありますか。

志賀拓広学校教育課長　家庭学習においては、家庭学習の手引きを先生方と作成して全ての家庭に配っておりまして、中でも保護者向けの家庭学習の手引き（保護者版）というのがあって、保護者を励まし、子どもが前に進めるような、背中を押せるような内容で作成しています。

ただし、これが子どもたちを直接救うようなものではないため、宿題の出し方とか、課題の与え方、そういった点は大きな課題として、今後も学校と一緒に考えていく必要があります。

福地裕之教育長　ただいま森委員からご指摘のありました家庭学習について、先日、学力向上推進協議会がありました。学校関係者や PTA の方も参加され、学校での授業の充実はもちろん大事でありますが、それに加えて、家庭学習を充実させていかないと、本当の意味での学力は付いていかないという話になりました。まさに委員がご指摘した集中力や意欲に関することです。当事者である子ども達とも話しましたが、家に帰って集中力が続くのは 15 分くらいという中学生の意見もありました。それだけ、集中力や意

欲を持続させることは大変なことであって、ICT の話につながりますが、ICT 機器を使って調べる事もできるし、遊ぶこともできてしまう。大変難しいものです。

ある校長先生からは、まずはやる気を起こさせなければ、という意見が出まして、子どもたち自身が、ルールや約束事を管理しながら、頑張る仕組みを考えていってはどうかという話が出ました。決して、学校や教育委員会からこれをやりなさいということではなく、子どもたちの中で話し合い、協議をして、こういう形で頑張って行こうというのが、自分たちの学校だけではなくて、相馬市全体で、進めていくことができないか、という方向で考えているところです。

菅野明彦委員　数学の点数の低さについて、数学的なものの考え方が足りていないのではないか、あるいは公式や定義を理解して使いこなせていないのではないか、数学に関しては RS だけではなくて、何か別の対策も必要なのではないかと思うのですが、また、数学学習の先進地への視察なども必要かとも思うのですが、そのあたりどのように考えていますか。

横山英彦教育部長　菅野委員ご指摘のとおり、数学は積み重ねが大切で、どこかでつまずくとついて行けなくなるというのが教科の特性としてございます。ある中学校では、小学校の部分から一度やり直しをしているところもあります。従いまして、読解力だけ向上すれば良いというわけではなく、各教科それぞれにポイントがありますので、子どもたちの様子を見ながら各学校で対応しているものと考えています。

志賀拓広学校教育課長　数学の学力については昔からの課題でありまして、中学校に上がったスタートの段階から、学力差が大きいことが課題としてございます。授業を行う際にもそのあたりを踏まえた工夫が必要となり、時間がかかってしまったりします。一方で、数学が好きな子、得意な子も伸ばしてあげたいので、その両方に力を入れるのが、難しいところであります。小学校では、ある程度スタートラインが揃うので、やりやすいのですが、中学校ではそのような課題があります。

ただし、今回の中学生の結果で言いますと、全国平均点と県の平均点が昨年度に比較して下がっている中、相馬市は向上していますので、相馬市の生徒たちは頑張っていると評価しています。今年度は、問題が難しくなっていったものの、相馬市の子どもたちは点数が向上しました。資料５－２にありますように、数学の問題が、文章量が多く、問題を解くスタートラインに立てない子どもが多いのではないかと推察されます。また、数学の問題８については、相馬市の子どもは無回答率が低くなっており、何らかの回答を導びこうと、頑張っている様子が見られます。

数学の点数をすぐに向上させる魔法のような手段はないのですが、少しずつ RS の取組の成果が現れ向上しているのではないかと考えます。

ただし、菅野委員ご指摘のとおり、読解力だけではなく、計算する力や公式を使う力などの基礎学力も大切ですので、計算処理する力を含めて指導を続けていくという点については課題であると認識しています。

福地裕之教育長　最終的には、教員の指導力・授業力向上が大切だと思います。教員の指導力が大きく影響します。数学学習の先進地の取組を見たらどうかというご指摘についてですが、例えば、福島県で実施しているコア・テ

ィーチャーという、見本となる先生の授業視察による教員の指導力向上の取組があります。また、算数・数学ジュニアオリンピックに取り組むことも対策のひとつとしてあります。そういった事例の情報収集も大事かと思います。

宗形明子委員　理科について、生活に密着した学問であり、相馬の子ども達は日常で豊かな自然に触れられる機会に恵まれているのだから、理科が得意なはずなのではという思いがあります。実際のところはそうではないのが、すごく不思議に思いますが、何故なのでしょう。

横山英彦教育部長　今年度の結果で言うと、理科の点数は、都市部の方が良い傾向にあるようです。

志賀拓広学校教育課長　数学が苦手な子は理科が苦手という傾向もあり、数学に対する課題と共通の課題があるのではないかと思います。理科好きの子どももおりますし、授業の中で理科に興味を持たせることが大切です。そういったところに、実際に映像を動かしたり音を出したりすることができる ICT を活用していくことが大切かと思います。

関根進委員　教科書を読み込むという基本的なことを、改めて実施して成果が出てきている、ということはすごいことで、企業に例えると多くの企業で行っている改善活動のように、現状に満足せず取り組み続けることで成果を出すことかなと思います。そういう意味では今後も継続していくことが大切で、今後すぐには結果が出なくても、続けて行くことで結果につながっていくものと思います。

　また、先生方が授業をやりやすくなっているということや、先生方自身も教科書を読み込むなどの変化が現れていることも成果だと思いますし、相馬に来ればRSに取り組むという雰囲気が出来ているということも良いことだと思います。

阿部勝弘市長　子どもたちの努力だけなく、先生方の努力により、成果が着実に現れてきていると感じています。事務局の説明の中で、ベテランの先生が、教科書を読み込んでいるという変化が紹介されましたが、先生それぞれに個別の指導スタイルを持っている中、相馬に着任して RS への取組を通じて、教科書の大切さに気付いたのだと思います。

　相馬に着任する教員の皆さんはそれぞれ異動で入れ替わりがある中、令和２年度から RS の取組を進めてきて、RS の浸透・定着をどのように測っているのかが、私としては気になるところです。

　また、もう一点、異動で相馬に着任する先生が、RS に対して抱くハードル・心理的負担をいかに解消していくか、相馬の取組は良いものだから、相馬で学んで他の地域にも広げて欲しいと県から後押しされるくらいにならないといけないと思いますが、その点についてはいかがでしょうか。

横山英彦教育部長　RSの浸透度合いにつきましては、指導委員会や校長会の場、さらには、各学校で指導主事が指導を行う際や、教育委員の皆さまに授業を見ていただく機会を通じて浸透度合いを測っているところです。

　校長会で、校長先生方の意見発表を伺うと、年々、校長先生方の熱意が高まっていることを感じております。また、指導委員会の先生方が実際に学校で指導する際も、前は孤軍奮闘という状況でありましたが、昨年度、今年度にかけてそういう状況は見られなくなっていると感じています。そうい

う意味では、段々と浸透がなされてきていると考えています。

また、RST の取組は、元々は県の事業で研究推進ということで推進してきたもので、県としても推進を後押しする立場であります。

RS の取組は１つのツールではあるのですが、先生方からすると、どうしても新しい取組という事で、真面目な先生方ほど「新しい教育法」として重く受け止めてしまう方もいらっしゃるのは事実です。そのような状況に対応するため、来年度については映像を用いて RS の活用について先生方に分かりやすく伝えていきたいと考えています。

志賀拓広学校教育課長　私自身も、昨年度に市教育委員会に着任して２年目になりますが、以前に市教育委員会に在籍していたときには RS の取組を行っておりませんでしたので、体感としてすごく進歩してきていると感じています。

教員は、自分がやってきた方法を変えて新しいものを受け入れるのが苦手というところもあると思います。中には教科書を使わないなど、自分のポリシーで指導する方もいらっしゃいます。また板書をするよりもプリントを配って穴埋めをしながら進める、というスタイルの先生もいます。そういう先生方に、RS の大切さや教科書の大切さをじわりじわりと伝えてきて、ようやく今があるのではないかと感じています。時には授業の仕方についての指導も必要となることもありますが、これも学校の中で RS のポイントを理解したうえで行えるようになってきています。ただ、市外から赴任する先生方にとっては、未知のものであるので不安は大きいかと思います。ただ、やらなければならないことは、教科書を大切にすることであるとか、板書を丁寧にすること、子どもの様子をよく見て進めることなど、RS の活用の有無に関わらず、本来やらなければならないことと変わらないので、そこを分かっていただければ大分気持ちが楽になるのではないかということは、指導主事の間で話をしているところです。

阿部勝弘市長　わかりました。これまでご苦労も多かったと思いますが、これは積み重ねだと思いますし、冒頭に教育長のご挨拶にもありましたが、継続性・安定性ということだと思います。

これは今後も着実に進めていきたいと思います。

福地裕之教育長　これまで継続してきていることは、すごいことであると思います。浸透してきている中、慣れで進める事にならないよう、改善の視点を忘れずに、進めていかなくてはならないと感じています。

阿部勝弘市長　それでは協議事項（１）についての協議を終わります。

（２）報告事項

相馬市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について

●協議内容

横山英彦教育部長　（別紙資料により説明）

横山英彦教育部長　２．目標の（１）時間外在校等時間に関する目標について、１つ目の「１箇月の時間外在校等時間が 80 時間を超えている割合を 0%とする。」は、現状値として、小学校では 1.8%、中学校では 0.1%となっています。

２つ目の「１箇月時間外在校等時間が 45 時間以下の割合を 100％にする。」は、現状値として、小学校では 28.2％、中学校では 18.9％となっています。

３つ目の「１年間における１箇月時間外在校等時間の平均時間を 30 時間程度にする。」は、現状値として、小学校では 33 時間、中学校では 29.3 時間となっています。ただし、中学校では部活動で土日に出勤した時間が含まれていないという現実がありますので、これをカウントする方法と、部活動の地域展開などの実際に減らしていく方法の２つを考えながら、平均 30 時間程度を目指していくということです。

４つ目の「１年間における時間外在校等時間を 360 時間以下にする。」は、現状値として、小学校では 396 時間、中学校では 351.6 時間となっていますが、中学校においては、先ほど述べた土日の部活動の時間がカウントされていませんので、実際にはもう少し長い時間となっているものと考えています。

目標の（２）ワーク・ライフ・バランスや働きがい等に関する目標について、１つ目の「全教育職員の年間の年次有給休暇の取得日数を 12 日以上にする。」は、現状値として令和６年度に取得日数が 12 日未満の教員の割合は、小学校で 22.6％、中学校で 41.0％であります。

阿部勝弘市長　ありがとうございました。先生方が働きがいをもってそれぞれの役割を果たしていただくことが、ひいては学力向上につながっていく、という風に思っています。それに必要な予算は確保して、着実に進めていってもらいたいと考えています。

菅野明彦委員　説明にあった、中学校の時間外在校等時間の中に、部活動は含めないというように聞こえたのですが、含めなくてよいのでしょうか。

横山英彦教育部長　中学校の時間外在校等時間は含めないのではなく、現状、土日の部活動に従事している分がカウントできていないということです。土日は直接部活動の現場に参加するため、一度職員室のパソコンで勤怠システムに入力するという先生方がなかなかいないというのが現状です。今後は、こちらをしっかりカウントしたうえで、目標時間内に収めていくという取組が必要となります。

菅野明彦委員　わかりました。あとは、先生の土日の部活動従事が少なくなるよう、地域展開を進めていかなくてはならないと思います。

関根進委員　１点確認です。２．目標の（１）時間外在校等時間に関する目標について、１つ目の「１箇月の時間外在校等時間が 80 時間を超えている割合を 0％とする。」と２つ目の「１箇月時間外在校等時間が 45 時間以下の割合を 100％にする。」とありますが、２つ目を達成すると、自ずと１つ目も達成ということになりますが、いかがですか。

横山英彦教育部長　これは、今後４年間の目標を段階的に示したものでして、１点目の目標は、即座に、来年度にでも達成したいものという位置づけとなります。

阿部勝弘市長　それでは協議事項（２）についての協議を終わります。

（３）その他

●協議内容

阿部勝弘市長　その他、皆様から何かございますか。

宗形明子委員　先日、相馬市史完成記念の講演会・パネルディスカッションに参加してきました。その中で市長より、完成した市史が大きな訓えと方向性を示してくれるという素晴らしいご挨拶があり、市史が完成して、私たちにとっては相馬の宝がまた１つできたという気持ちなのですが、市史編さんが完結した今、今後これをどのように活用していきたいか、市長のお考えをお聞かせください。

阿部勝弘市長　まず、市史編さん事業について、相馬の歴史の記録としては様々なものが様々な形で点在していますが、それを皆さんに知ってもらうために、市史として整理して、後世に残すことに価値があると考えています。

　我々の先人たちが様々な苦労をされた、なぜそのような状態になったのかを知るためには全体の歴史も知る必要がありますが、歴史全体を知ったうえで地域の歴史を深掘りしていくことが、今の自分たちの地域おこしにもつながり、歴史を学ぶ意義にもつながってきます。そういう意味で、この度編さんが完了した相馬市史は、価値のあるものとなったと思います。

宗形明子委員　当日は相馬の歴史への深い想いを持つ方々のパネルディスカッションだったという事を前提に、こういった要望があったという事を市長へお伝えしたいのですが、相馬市史のダイジェスト版を作って、相馬の歴史を浸透させて欲しい、できれば学校教育で行って欲しい、というご意見がありました。執筆された先生からは、プロジェクトチームを作ってダイジェスト版を作っていくという事に対して、ぜひ協力したいという力強いお声を頂戴しています。大人向けのダイジェスト版と、もしも学校教育の一環とするならば「こども市史」というのも一緒に作ったら良いのではというご提案をいただいていますので、そのことも含めて、相馬市の行政の中で検討していっていただきたいと思います。

阿部勝弘市長　もちろん、相馬市史全てを読むだけでも大変なものでありますので、それを分かりやすく、ダイジェスト版なり、要約版なりの形で皆が知るという何らかの機会を持てれば良いとは思います。先生方から協力したいとのお声をいただいているということもありがたく思います。

福地裕之教育長　学校教育でとなると、小学校・中学校においては学習指導要領で決められた内容があるため、そこに入ってくるとなると、なかなか難しい面が出てくると思います。

　一番は、子どもたちが相馬のことを知るということが大事かと思いますので、これまでも教材「ふるさと相馬」で相馬のことが分かる内容が記されていて、そういったもので学習しているというところがあります。

阿部勝弘市長　ダイジェスト版を作るということと、それを教育現場で子どもたちに教えるということはまた別だと思いますので、いずれにしても、相馬市史を全て読んで頭に入れてくださいというのは大変なことだと思いますので、もう少し分かりやすくという部分では、「ふるさと相馬」の中で概略的につかむというのもあって良いのではないかと思います。

宗形明子委員　「ふるさと相馬」の中に、野馬追と二宮仕法のことは記載されておりましたが、古代からの歴史についても盛り込んで欲しいと思います。

　それから、市史編さんに関わってこられた人材の面では、先生方が、相馬市教育委員会の市史編さん室の職員達がすごく優秀だと、市史編さんに際し、市民目線で様々な編集上の指摘をくれたという事を褒めていらっしゃ

いましたので、ぜひ市長にお伝えしておきたいと思います。

菅野明彦委員　「ふるさと相馬」の改訂版が出る予定はありますか。

横山英彦教育部長　「ふるさと相馬」については、現在はWeb版となっておりまして、逐次改訂を行っております。

菅野明彦委員　ではその際に、今のような意見も取り入れていただければと思います。

志賀拓広学校教育課長　「ふるさと相馬」は社会科副読本という位置づけになっておりまして、これも、学習指導要領に従って作られています。従いまして、小学校の教科書が改訂される際に、合わせて改訂の作業をしていって、基本的には学習指導要領の中身に沿ったものの相馬版という形です。古代からの歴史が掲載されていないのはそういった理由になります。

宗形明子委員　私が最初に「ふるさと相馬」を頂いた際に、その版では相馬市の名誉市民が掲載されていませんでしたが、そのことを指摘したら後の改訂版では掲載していただけたので、そのように可能な範囲でご対応いただければと思います。

阿部勝弘市長　その他、皆様から何かございますか。

（その他協議事項なし）

阿部勝弘市長　その他なければ、これで今日の会議を終わります。

5　閉　　会